板書例

1　城崎温泉に着く前

・電車に跳ね飛ばされてけが
↓後養生に一人で城崎温泉へ

・脊椎カリエス＝致命傷
①二・三年で出なければ後は心配いらない。
↑もう三年以上になる（P二〇六）
②三週間以上―我慢できたら五週間くらいいたい
↑三週間いて、自分はここを去った。（P二〇六）
☆語り手が振り返って語っている構造（＝入れ籠型構造）となっている

⇦

読解のカギ
なぜ三週間で去ったのか？
何を我慢できなくなったのか？

2　城崎温泉に着いて

主人公の様子
・頭はまだ何だかはっきりしない
物忘れが激しくなる
⇔しかし（同時に）
気分は近年になく静まる
落ち着いたいい気持ち
↓頭（身体）は不調だが、気分（精神）は好調。

・よくけがのことを考えた。
沈んだこと・寂しい考え
⇔しかし（同時に）
静かないい気持ちがある。
一つ間違えば死骸になっていた。
青い・冷たい
祖父や母の死骸とも何の交渉もない
↓それは寂しいが、恐怖させない。

⇦

死を身近に感じ始める。
ロードクライブのような使命感を感じたかったが、心は静まってしまった（使命感との距離感）。
「何かしら」（＝言葉にできない）死に対する親しみを覚える。

⇦

主人公は死を「寂しい」ものだが同時に「静かな」もの（＝いい気持ちのもの）ととらえ、「何かしら」の親しみを覚えている。